愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第 18 号
2017.5
15-21p

安城市寄島遺跡における古墳時代前期の集落

永井 邦仁

鹿乗川流域遺跡群南部の一角を占める寄島遺跡において、古墳時代初頭～前期にかけての竪穴建物を中心とする集落景観について考察した。竪穴建物の周溝状床下施設の有無が、集落変遷の画期を見通す鍵になると考えられる。

1. 寄島遺跡の全体像

安城市東部の沖積低地を南北に流れる鹿乗川は、その河道が碧海台地の東縁を縁取り、その流域には多数の弥生～古墳時代を中心とする集落遺跡が分布している。これを仮に鹿乗川流域遺跡群をして括ると、その規模は南北約 5km になる。そして同遺跡群は、東西に幅広く展開する北部の一群（北群）と、南北に細長い南部の一群（南群）に大別することができる*。

寄島遺跡は、上記の南群に属する集落遺跡である。遺跡の発掘調査は、愛知県埋蔵文化財センターによって平成 18 年（2006）から断続的に行われており、平成 29 年 3 月には、平成 18・23・24・25 年度分の調査報告が刊行されている（愛知県埋蔵文化財センター 2017、以下、報告書）。この調査では、寄島遺跡 13B 区と 11B 区の 2 調査区で、埋没した旧河道が検出されている。この旧河道は主に弥生時代後期以前に機能していたもので、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭以降、急速にシルトの堆積が進行し、平安時代に至るまで沼沢地の状況を呈する**。このような旧河道は北側に位置する姫下遺跡や南側の下懸遺跡・惣作遺跡でも検出されているが、埋没状況は各調査地点でほぼ共通しており、これらは蛇行する一連の旧河道と考えることができる。本稿ではこれを鹿乗川旧河道と呼ぶ。

さて、寄島遺跡の発掘調査では、この旧河道の右岸の微高地（自然堤防）において弥生

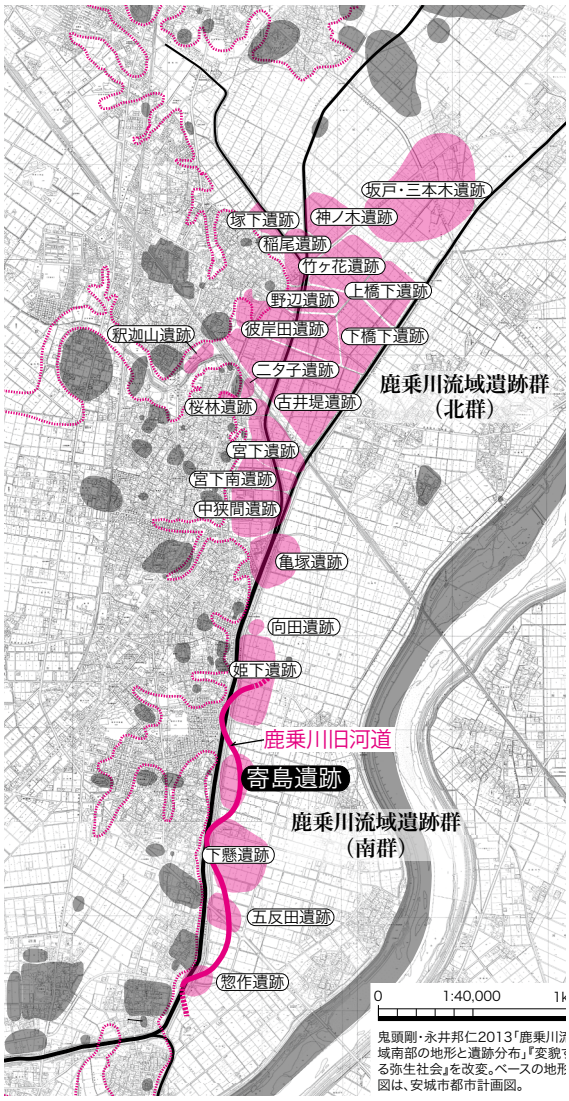

図 1　鹿乗川流域遺跡群

*もともと鹿乗川流域遺跡群は、本稿でいう同遺跡群北群を指す。考古学フォーラム 2013 を参照。
**旧河道由来の沼沢地は平安時代後期以降水田となる。寄島 11B 区、下懸 09B･C 区、惣作 09C 区で畦畔遺構が検出されている。

時代中期前葉～平安時代の遺構と遺物が検出されている。したがって旧河道は、集落の立地する微高地東縁を縁取っていることになる。一方、この微高地と台地（河岸段丘）との関係についてはまだ明らかになっていないが、段丘崖が弓形に後退していることから、台地と微高地の間にも旧河道が存在した可能性が高い。以上のことから、この微高地（集落地）は旧河道などによって囲まれた、南北約480m、最大幅約120mの紡錘形をしていると推定される（図2）。鹿乗川流域遺跡群には、このような河道や沼沢地を輪郭とする集落群が点在していたと考えられるが、ここまで規模が推定可能な事例はまだ少ない。

この微高地上の遺構・遺物は、先述のように複数時代に及ぶが、その大半を弥生時代後期後葉～古墳時代中期前半のものが占めている*。このうち竪穴建物跡とその可能性がある遺構は計70基、掘立柱建物跡は7基で、鹿乗川流域遺跡群中で際立った存在である**。本稿では、発掘調査で導き出されたこの特徴を活かして、寄島遺跡における集落の構造や変遷について検討を行う。一方で、同遺跡群における弥生～古墳時代集落の動態については、これまでにマクロ的な視点からの言及がなされており、他の地域や遺跡群との比較検討が進みつつある***。本稿は、その視点の前段階という立場をとり、寄島遺跡の集落にみられる諸特徴を遺跡群の中でどのように位置付けられるのか、という試みである。

2. 寄島遺跡の竪穴建物跡

まず竪穴建物跡を抽出して検討する。竪穴建物跡が集中するのは12B区～07B区の4調査区である（図2）。当該調査区は07A区の標高が最も高い（遺構検出面は約7.2m）。そこから南方150～200mの旧河道まで緩やかな下り

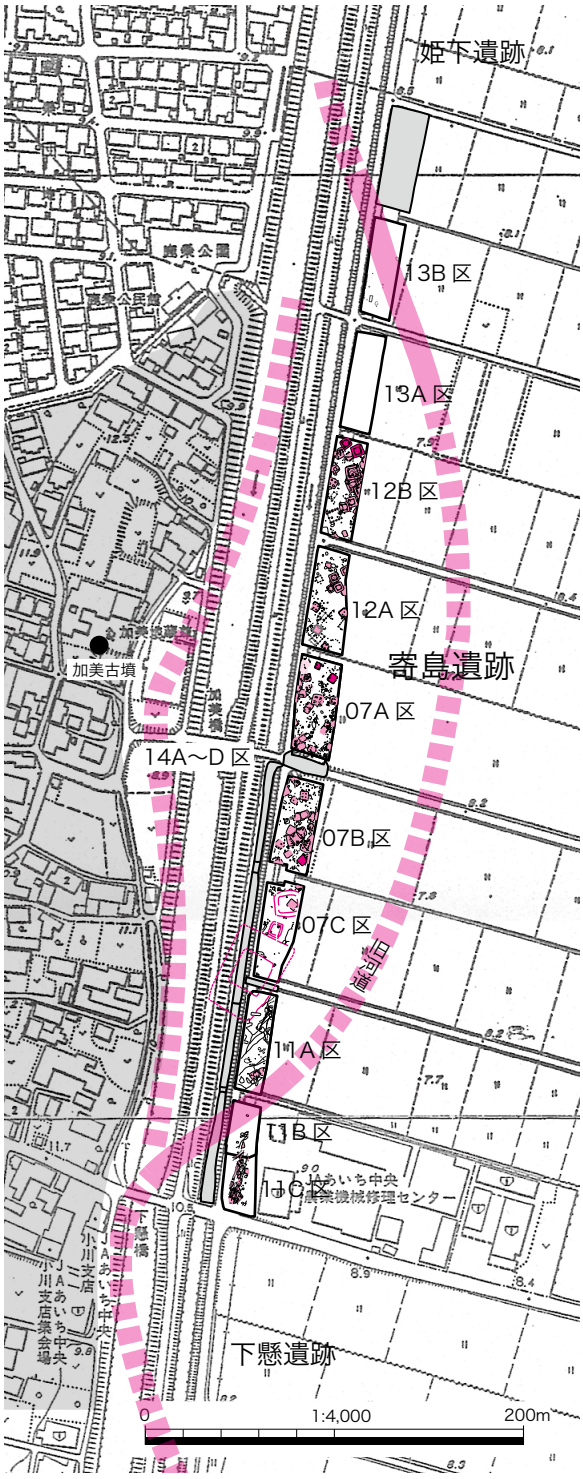

図2　寄島遺跡全体図

*当該期以外では8世紀後半の須恵器が若干ある。なお旧河道左岸（南側）に位置する寄島遺跡11C区は下懸遺跡の集落域にッ含まれる。当該調査区では古代・中世の遺構も検出されている。

**姫下遺跡で5基など（愛知県埋蔵文化財センター2012）、調査面積の広い遺跡群南群に偏る傾向はあるが、北群においてもG地区（宮下遺跡・宮下南遺跡）で5基（安城市教育委員会2011）、神ノ木遺跡で18基以上（未報告）などを数える。

***鹿乗川流域における弥生～古墳時代の集落動態については、鹿乗川遺跡群北群の発掘調査報告書における考察（岡安2013）や、平成25年に開催されたシンポジウム（考古学フォーラム2013）において、遺跡群としての動態が示されている。

となっており、11A 区の遺構検出面標高は約 6.8m である。これに対して 07A 区から北方は 12A 区の調査区東壁付近を中心に約 10cm 窪み、12B 区にかけて再び 07A 区と同じ標高となっている。これらの高低差は、遺構の残存状況からすると集落活動期から大きく変化していないと考えられ、例えば 12A 区南東部で建物遺構分布がやや希薄になっている点は、こうした微地形に対応したものであろう。おそらく小さな窪みに雨水が集中するために、建物を建てるのが避けられたものと考えられる。

このように、微地形が集落形成に与える影響は、一定期間を対象とすることでみえてくる。そこで、竪穴建物が建てられた時期を絞り込みながら、それら遺構の諸属性を比較する（表 1）。

(1) 平面形態　竪穴建物跡の平面形は、概ね隅部に丸みを帯びているが、その丸みが半径約 0.5m 以上の顕著なものとそれ以下のものとに分けることができる。前者を隅丸方形と呼ぶ。07A 区 1113SB など大型のものに顕著である。また隅丸方形には各辺も緩く丸みを帯びて張り出しているものもあり、07A 区 1330SB などのようにむしろ楕円形とでも呼ぶべきものもある。

(2) 平面規模　平面形一辺の長さで数値化するとばらつきがあって大小の顕著な差はみえにくいが、6.0m 以上のものを大型竪穴建物とする。07A 区 1113SB・12B 区 025SI は単独で所在するが、12B 区 028SI ～ 031SI の 4 基は小型の 032SI を途中に挟む重複関係にあるまた 07B 区 2115SB も規模の近い 2133SB とほぼ同一地点に造られたものである。

(3) 建物方位　残存状況の最も良好な辺を選んで、グリッド北からどれだけ東西に振れているかをみる。寄島遺跡では概ね全ての建物遺構が東西に大きく振幅している。これはその東方で弧状に延びる旧河道を軸線として建物方位を定めているためと思われる。方位のばらつきが多いこともこの点に関わっていると考えられる。一方で 12B・12A 区ではグリッド北から西へ 22 ～ 28°振れた方位でのまとまりがみられる（12B 区 024・025・028 ～ 030・032SI・110・111SI、12A 区 061 ～ 063SI）。これらは地形環境に合わせると揃わない建物

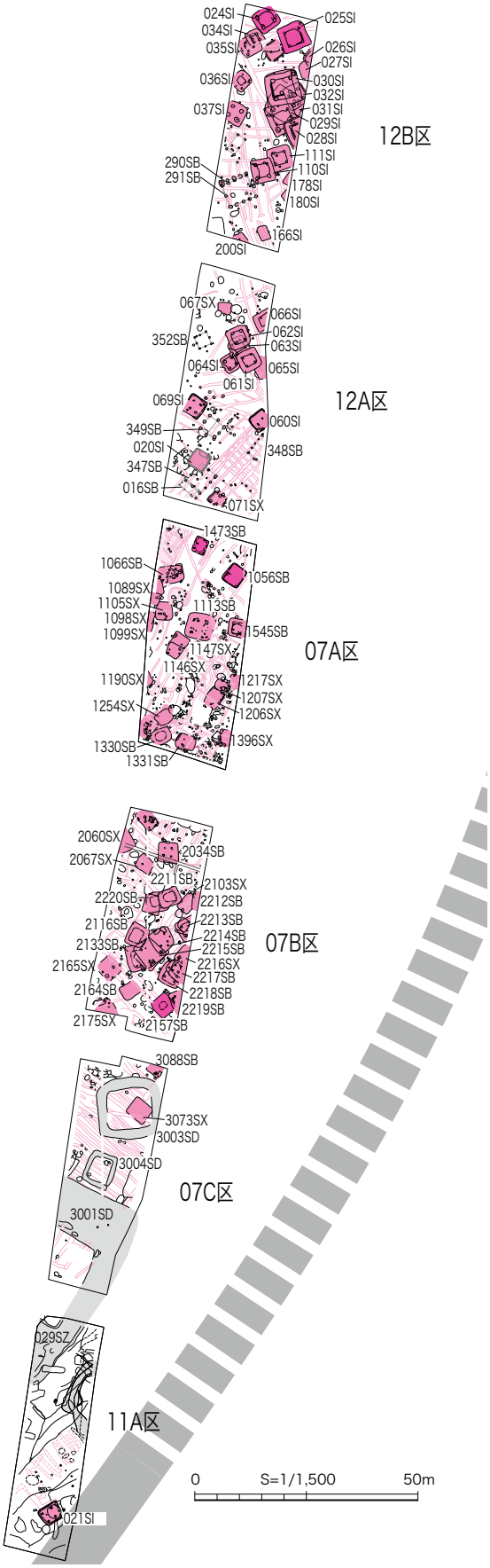

図3　寄島遺跡の建物遺構図（12B～11A 区）

表1　寄島遺跡の竪穴建物跡一覧（12B区～11A区）

調査区	遺構名	平面形	平面規模(m)	方位測定辺	建物方位	壁溝	推定主柱穴数	検出主柱穴	床下全面掘り方	周溝状床下施設	その他遺構	先後関係	コメント
07A	-	隅丸方形				1226SD			×	×	1073SK～1082SK	1226SD→1610SD	
07A	-	長方形				1280SD	4	×,1286SK,1294SK,×	×	×	1282SK～1294SK		
07A	1056SB	隅丸方形	4.6×4.2	西	N-30-E	1639SD	0	なし	○	×	1638SD間仕切溝？,1636SK,1637SK(貯蔵穴)	1056SB→1046SD	床面炭化物、炭化材
07A	1066SB	隅丸方形	1.8以上×3.7	東	N-12-W	なし	0	なし	○？	×	なし	1066SB→1065SK	
07A	1098SX	隅丸方形	0.7以上×2.7以上			なし	0	なし	○	×	不明	1099SX→1098SX	
07A	1099SX	不明	0.4以上×2.9以上			なし	0	なし	○	×	不明	1099SX→1098SX	
07A	1105SX	隅丸正方形	4.0×3.8	東	N-5-W	なし	0	なし	×	×	1093SK～1097SK	1105SX→1226SD・1092SD	竪穴建物の可能性あり
07A	1113SB	隅丸方形	6.2以上×5.9	西	N-15-E	なし	3～	1442SK,1463SK,1454SK他は微細なため特定不能	×	土層断面3層＋上層に貼床	1434SK～1470SK		床面炭化物、大型建物
07A	1146SX	隅丸長方形	3.4×2.9	東	N-45-E	なし	0	なし	×	×	1139SK,1141SK～1144SK	1147SX→1146SX	
07A	1147SX	方形	3.7以上×3.7	西	N-32-E	なし	0	なし	×	×	1137SK	1147SX→1146SX	
07A	1206SX	隅丸長方形	4.4×3.5	東	N-35-E	なし	0	なし	○	×	1586SK,1589SK～1591SK,1598SD(掘り方？)	1206SX→1203SD	竪穴建物可能性高い
07A	1217SX	隅丸方形	1.4以上×3.4	西	N-5-E	なし	0	なし	○	×	なし	1217SX→1020SD	
07A	1254SX	隅丸長方形	3.8以上×3.0	西	N-42-W	なし	0	なし	○	×	なし	1254SX→1253SX	
07A	1330SB	隅丸方形	4.6×3.5	東	N-27-W	なし	0	なし	×	土層断面3層＋上層に貼床	なし	1376SX・1357SB→1330SB	床面炭化物
07A	1331SB	隅丸方形	4.5×3.4	東	N-19-E	なし	0	なし	○	×	なし	1376SX・1329SD→1331SB	床面炭化物
07A	1376SX	隅丸方形	2.8以上×1.8以上	東	N-30-E	なし	0	なし？	○	×	なし	1376SX→1330SB・1331SB	
07A	1394SX	隅丸方形	3.8×1.7以上	西	N-10-E	なし	0	なし	×	×	なし	1394SX→1396SX	竪穴建物可能性あり
07A	1473SB	隅丸方形	3.6×3.1	東	N-24-E	なし	-	特定できず	○	×	1618SK～1632SK	1474SD・1475SD→1473SB	←第2面 1040SX、松河戸Ⅱ式
07A	1545SB	隅丸方形	4.1×3.0以上	西	N-6-E	なし	4	1641・1642SK,×,1647/1648/1646SK,1643・1644SK	×	土層断面3層＋上層に貼床	なし	1531SD→1545SB→1543SD	←第2面 1118SX
07A	1562SB	隅丸方形	3.1以上×1.0以上	西	N-30-E	なし	1	1634SK?	○？		なし	1553SD→1562SB	
07B	2034SB	隅丸正方形	4.5×4.7	西	N-3-E	なし	4	2202/2196SK,2203/2197SK,2198SK,2204/2205SK	○	×	なし	2035SD・2036SD→2034SB→2056SD	
07B	2067SX	不整方形	3.8×3.2	西	N-35-E	なし	0	なし	×	×	なし	2099SD・2068SD→2067SX	竪穴建物可能性あり
07B	2103SX	長方形	4.3×3.0	西	N-41-E	なし	0	なし	×	×	なし	2104SK→2103SX	竪穴建物可能性あり
07B	2116SB	隅丸方形	4.9×4.3	西	N-27-E	なし	0	なし	×	土層断面2・3層			
07B	2133SB	床面減失、隅丸正方形	5.8×3.2以上	西	N-15-W	なし	4	2207SK?,2208SK?,2210SK?,2209SK?	×	土層断面1層	なし	2133SB→2116SB・2132SX	床面減失
07B	2157SB	隅丸正方形	4.4×4.4	東	N-38-W	なし	0	なし	×	土層断面2層	なし	2146SD・2159SD→2157SB→2147SD	床面炭化物、廻間終～松河戸
07B	2164SB	隅丸長方形	3.8以上×3.4	西	N-30-W	なし	0	なし	○		なし	2195SD→2164SB→2147SD	床面炭化物
07B	2165SX	正方形	4.7×4.0以上	西	N-40-W	なし	0	なし	×	×	なし	2165SX→2147SD・2161SD・2160SK	
07B	2187SX	方形？	2.7以上×1.6以上	西	N-38-W	なし	-	なし？	○？	×？	なし	なし	
07B	2211SB	隅丸長方形	4.8×3.8	西	N-17-W	なし	0	なし	×	土層断面3層＋上層に貼床	なし	2220SB→2211SB	←第2面 2100SX
07B	2212SB	隅丸方形？	1.3以上×0.9以上	西	N-45-E	土層断面2層？	-	不明	×？	×？	なし	2274SD・2273SD→2212SB	
07B	2213SB	隅丸方形	4.7以上×4.3以上	西	N-31-W	なし	4	2319SK,2318SK,×,2320SK	×	土層断面3層	なし	2284SD・2285SD・2286SD→2213SB	床面炭化物、←第2面2115SX
07B	2214SB	隅丸方形	5.2×4.9	西	N-34-W	なし	4	×,2322SK・2323SK,2325SK,2327SK・2328SK	○		2329SK	2215SB→2214SB→2111SK・2114SK	床面炭化物
07B	2215SB	隅丸正方形	6.1×5.8	西	N-36-W	なし	4	2332SK,×,2329SK?,2334SK	×	×	2333SK・2335SK～2338SK	2215SB→2214SB	←第2面2132SX
07B	2216SX	隅丸方形	4.0以上×2.4以上	西	N-40-E	なし	4	2345SK,×,×,×	○		なし	なし	隅丸方形
07B	2217SB	隅丸方形	4.4以上×3.8以上	西	N-43-E	なし	4	2348/2347SK,2351/2350/2349SK,2357SK,2355/2354/2353SK	×	土層断面2層＋上層に貼床	2343SK,2352SK,2356SK	2218SB→2217SB→2216SX	←第2面 2135SX
07B	2218SB	隅丸正方形	5.1×5.0	西	N-29-E	なし	4	2359SK,×,×,2360SK	×	土層断面3層	2358SK	2218SB→2217SB→2216SX	
07B	2219SB	方形	3.6以上2.2以上										
07B	2220SB	隅丸方形	4.8×4.4	西	N-8-W	なし	0	なし	×	土層断面3層＋上層に貼床	なし	2220SB→2212SB	←第2面 2108SX
07C	3073SX	正方形	4.8×4.3	西	N-35-E	なし	0	なし	○		なし	3060SD・3075SD・3077SD・3078SD→3073SX→3072SD→3003SD	
07C	3088SB	正方形	1.8以上×3.3	東	N-40-E	なし	0	なし	○		×,×,3110SK～3114SK,×	3088SB→3087SK	
11A	021SI	隅丸方形	4.7×4.0	西	N-35-W	土層断面5層	4	040SP,043SP,042SP,041SP	○			022SD→021SI→013SK	
12A	020SI	正方形	4.2×4.2	西	N-35-E	058SD		なし	×	土層断面にあり	057SK北壁土坑？	075SK→020SI	
12A	060SI	西隅のみ隅丸正方形	4.2×4.1	西	N-38-W	161SD		なし	×	土層断面にあり	162SP貯蔵穴？,231SP,232SP	133SD→060SI	
12A	061SI	隅丸正方形	4.8×4.7	東	N-28-W	なし		346/333SP,334SP,336SP,335SP	×	332SD	なし	063SI→062SI・061SI→064SI、065SI→061SI、床面炭化物	
12A	062SI	隅丸正方形	4.9×4.8	西	N-23-W	なし		300SP,301SP,303SP,302SP	×	299SD	なし	063SI→062SI、床面炭化物	
12A	063SI	隅丸正方形	4.4×0.7以上	西	N-29-W	なし		340SP,341SP,344SP,342SP	×	339SD	なし	063SI→062SI・061SI→064SI、065SI→061SI、床面炭化物	
12A	064SI	隅丸正方形	4.0×3.4	東	N-32-W	なし		305SP,306SP,308SP,307SP	×	304SD※北総隅キレ	なし	063SI→061SI→064SI、床面炭化物	
12A	066SI	方形	4.0以上×3.9	西	N-24-W	なし		331SP?	×	330SD	なし	294SD→066SI	
12A	069SI	正方形	4.6×4.2	東	N-33-E	295SD		229SP,297/230SP,227SP,298SP	×	掘り方・床下施設なし	296SP,228SP		
12A	071SX	正方形	3.7×3.2	西	N-42-E	243SD		なし？	×	掘り方・床下施設なし	078SP？,239SP？	071SX→130SD・131SD	
12B	-	正方形		西	N-33-W	090SD		なし		不明	なし	090SD→091SD	
12B	024SI	四隅丸正方形、床面炭化物	5.4×5.0	西	N-36-W	なし		041SP,043SP,045SP,044SP_抜き取り	×	046SD＋上層に貼床	040SL東壁付近焼土炭化物集積	039SD→024SI	床面炭化物
12B	025SI	北東隅のみ隅丸正方形	6.1×6.0	西	N-18-W	なし		047SP,048SP,049SP,050SP	×	052SD	051SD間仕切溝？050SP取り付く	039SD→025SI	床面炭化物、松河戸Ⅰ式
12B	026SI		2.7以上×1.9以上	西	N-37-E	7・8層		不明	×	なし	中央くぼみは別遺構？	027SI→026SI	
12B	027SI	隅丸正方形	3.6×2.0以上	西	N-18-W	なし		なし	×	なし	なし	027SI→026SI	
12B	028SI	隅丸正方形	6.4×4.0以上	西	N-22-W	なし		063SP	×	065SD＋上層に貼床	064SD間仕切り溝？	031SI→032SI→030SI→029SI→028SI	
12B	029SI	正方形	7.0×6.2	西	N-22-W	なし		066SP,067SP,(114SP),068SP	×	069SD	なし	031SI→032SI→030SI→029SI→028SI	
12B	030SI	北西・北東隅のみ隅丸正方形	7.6×7.6	西	N-8-W	055SD(北壁)		076SP,077SP,079SP,078SP	×	082SD	081SD間仕切溝？080SP北東隅ピット	031SI→032SI→030SI→029SI→028SI	床面炭化物
12B	031SI	正方形	7.8×6.7	西	N-32-E	不明		282/275SP,113SP,285SP(289SP),×	-	-	なし	031SI→032SI→030SI→029SI→028SI	
12B	032SI	正方形	5.1×4.7	東	N-31-W	18層(東壁)		281/280SP,277SP,279SP,284SP	-	×	なし	031SI→032SI→030SI→029SI→028SI	
12B	034SI	正方形	3.6×3.3	西	N-28-W	なし		146SP,147SP,149SP,148SP_抜き取り	×	150SD	なし	035SI→034SI→033SD	床面炭化物
12B	035SI	正方形	4.9×4.6	西	N-28-W	なし		221SP,287SP,(218SP),(231SP)	×	222SD	なし	035SI→034SI→033SD	
12B	036SI	隅丸正方形	5.3×4.1	西	N-42-W	なし、但し5層（東壁）か		×,202SP,203SP(204SP),206SP	×	201SD	なし	163SD→036SI	床面炭化物
12B	037SI	隅丸正方形	4.7×4.4	東	N-28-E	なし		142SP,143SP,145SP_抜き取り,144SP_柱痕	○	×	なし	225SD→037SI	
12B	110SI	正方形	5.4×5.3	西	N-14-W	なし		261/167SP,169SP,171SP,184SP_抜き取り	×	172SD	168SP,247SP	111SI→110SI、床面炭化物	
12B	111SI	北東隅のみ隅丸正方形	5.2×5.0	東	N-16-W	なし		263/173SP,174SP,176SP,264/175SP_抜き取り	×	177SD	266SP	111SI→110SI、床面炭化物	
12B	166SI	隅丸長方形	3.3×2.3	東	N-21-W	なし		なし	-	×	なし	194SD・ 249SD・254P→166SI	
12B	178SI	方形	2.8以上×1.3以上	西	N-44-E	なし		不明	○？	×？	なし	179SD→178SI	
12B	180SI	方形	1.9以上×1.5以上	西	N-37-W	なし		不明	○？	×？	なし	181SD→180SD	
12B	200SI	隅丸正方形	2.5以上×1.9以上	東	N-39-W	なし		×,260SP,×,×	○？	×？	なし	200SI→215SK	

方位を揃えているわけで、土地利用や建物配置について一定の統制がとられていたと考えられる。

(4) 掘り方・周溝状床下施設　寄島遺跡の竪穴建物跡を最も特徴づけるものである。竪穴建物は、地面を掘り下げてその底面に柱を据えて上屋構造を作るものである。その工程初期の竪穴掘削時には、掘削具による粗掘りをするためその底面は凹凸が発生する。その凸部分を削って凹部分へ均すことも可能であるが、全体に新たな土やブレンドした土を敷いて均すこともある。一般に、後者を貼床と呼び、時代を問わずなされる工程である。

これに対して、壁から一定幅で底面を周溝状に掘り下げる工程が存在する*。これは竪穴を壁面から掘削することで、結果的に周溝状の掘り方になる可能性も考えられるが、寄島遺跡の竪穴建物跡における土層断面をみると、明確に溝状の掘り込みとなっている。つまり意図的に周溝状に掘られたものであり、掘り方と異なる。また一部の竪穴建物跡（07B 区 2211SB など）では、周溝状の土層の上位全体に、異質な土で貼床を施しているものがある。つまり貼床とも別の目的があったと考えられる。このような状況から、この遺構を周溝状床下施設と呼ぶ。目的としては、竪穴内の湿度をコントロールすることにあったと思われるが、明らかではない。

周溝状床下施設のある竪穴建物跡は、先述の (3) に挙げた方位が揃う一群を中心にみられ、12B 区に多く分布している。これに対して 07A･B 区でも存在するが、上層に貼床を伴っているタイプに限定される。遺構の時期は古墳時代前期の各段階（廻間Ⅱ式～松河戸Ⅰ式）に相当するので、一時的な存在ではない。しかし古墳時代中期前葉段階には平面規模の小型化が進むが、それに伴って周溝状床下施設がみられなくなる。

(5) 壁溝　周溝状床下施設の存在とも関わるのが、壁溝の有無である。(4) で挙げた周溝状床下施設のみられる竪穴建物跡では壁溝がごく一部でしか確認されていない。さらに 12B 区 025SI・028SI・030SI では主柱穴間すなわち周溝状床下施設の内辺に沿って間仕切り溝のような小溝が検出されている。なおこの小溝はわずかな痕跡で、主柱穴間を四周するものはない。掘り込みによってできたものではなく、おそらく柱間に落とし込んだ部材の圧痕と考えられる。こうして (4) と (5) を通じてみえてくるのは、竪穴建物内は柱の位置を基点に区画され、それは周溝状床下施設のある空間とない空間に対応しているということである。比較的規矩の整った建築の一様式といえるのではないだろうか。そして一定期間にわたって同一様式の建物が方位を揃えてまとまっている点が注意される。

3. 寄島遺跡の掘立柱建物跡

寄島遺跡では、12A・B 区において掘立柱建物跡計 7 基が検出されている。竪穴建物跡の検出数に比べてはるかに少ない数であるが、調査区全体を通じてピットの検出が目立たないことから、これ以上の数は想定しがたい。さらにこれらは溝などで外部から遮蔽されていない。

さて、最大規模となる 12B 区 290･291SB は、同一地点で同一規模(5.1 ～ 5.7m×6.0 ～ 6.3m) の重複であることから、建て替えと推測される。顕著な出土遺物がなく時期を特定しがたいが、ほぼ全ての柱穴から土師器（ハケ調整甕など）の小片が出土していることから、古墳時代前期のものである可能性が高い。他の竪穴建物跡との重複はないが、東側に 110SI がきわめて近接しているため、これと同時存在した可能性は考えにくい。110SI は 111SI に一部が重複する同規模の竪穴建物跡で、111SI から建て替えられたと考えられる。このことから 111SI と 290・291SI が同時に存在した可能性もある。

12A 区 349SB は 1 間 ×2 間と小規模ながら近接棟持柱建物であり、特殊な性格が想定される。後述する竪穴建物跡（069SI）が約 2m 北

*発掘調査時に「幅広周溝」と呼んでいたもの。以前は床面の認識が明確でなく、これを完掘した状態が床面なのか掘り方なのか不明であった。土層断面の確認で床下に相当することが判明した。呼称については、幅広の壁溝と混同されるため用いない。

西に存在するので、それと同時存在した可能性は低いと考えられる。349SB の時期については 199SP・200SP・215SP の柱穴から土師器小片が出土しており、古墳時代前期と推定される。当該建物周辺では、ほぼ同じ方位で総柱建物跡 347SB、側柱建物跡 348SB の 2 基が所在している。これらの柱穴出土遺物は 347SB と似た状況であることから近い時期が想定され、347 ～ 349SB が一連の建物群である可能性がある。このうち 347SB は古墳時代前期後半の竪穴建物跡 020SI に先行しているので、建物群の時期を同前半とみることも可能である。020SI は弥生時代中期前葉の墓が片付けられた跡（258SU）を掘り込んでおり、

以上 2 つの掘立柱建物（群）について時期を中心にみたところ、古墳時代前期に収まる可能性が高いものの、竪穴建物との立地関係では、明確に区分されていない点が指摘できる。かえってその性格を特定しづらい。

4. 区画溝？ 12B 区 033SSD

以上、寄島遺跡における竪穴建物跡と掘立柱建物跡の各事象をみてきたが、大型竪穴建物跡と近接棟持柱建物の存在以外には、周溝状床下施設が竪穴建物建築様式に関連していることを想定するにとどまった。

建物遺構以外で注目されるものに、12B 区北部で L 字形に屈曲する溝 12B 区 033SD がある。幅約 1.1m、深さ約 0.2m である。北西から南東方向へ延びる溝は、グリッド北から西へ約 20°振れている。発掘調査時の所見では、033SD は重複する竪穴建物跡群の中で最古に位置付けられる 031SI よりは新しく、建物方位の揃う 028 ～ 030・032SI より古いことになっている。しかしこれらは複雑な重複関係であることや 033SD が浅いことから、それらの先後関係については出土遺物でも検討する必要がある。

033SD は屈曲して 034･035SI と重複するが、当該遺構の土層断面では明らかに 033SD の方が後に位置付けられる。034SI の主柱穴からは多数の土師器壺・甕類が出土しており、034SI 埋土の屈折脚高杯（E-52・53）とともに横ミガキがなされ、姫下遺跡で出土しているものと同じ特徴をもつ土器群である。これとほぼ同時期とみられる土器群が 025SI や 030SI からも出土している。033SD 出土土器は横ミガキがなく

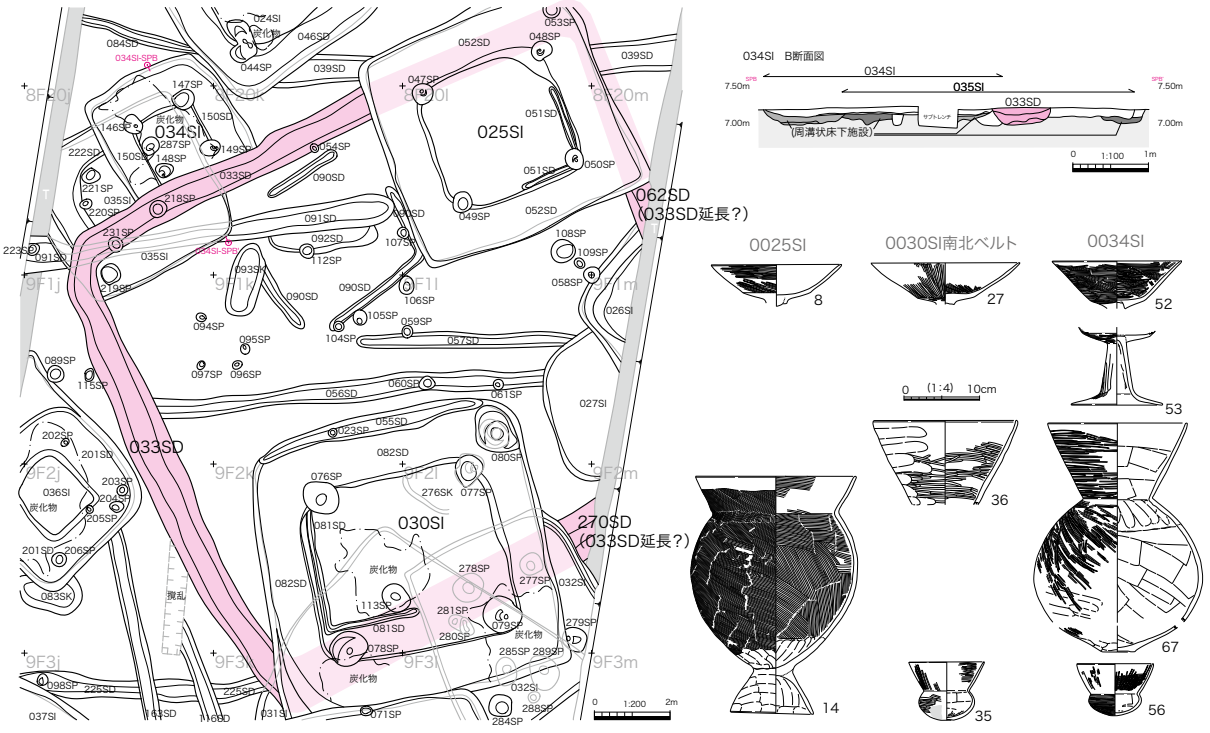

図4　寄島遺跡12Ｂ区北部の遺構と遺物（報告書より）

さらに後出的な様相を示している。以上のことから、033SD は重複関係のある竪穴建物跡のいずれよりも新しい時期にということになる。すなわち寄島遺跡の古墳時代前期集落の最末期に構築されたものとみなされる。

ところがこの溝からは特徴的な遺物が出土しておらず、祭祀的要素もみえてこないため、性格が明らかではない。

5. むすびにかえて

寄島遺跡の発掘調査成果に基づいて、その古墳時代前期集落の特徴を抽出すべく、特に竪穴建物跡の構造と配置に注目して整理した。

結果、竪穴建物跡と掘立柱建物跡、あるいは大型竪穴建物跡との間を区画・遮蔽する施設はなく、また大きな時期差も見出せないことから、集落地の中でこれらが混合して存在していたことが確認できた。このことによって、当該集落が強力な首長層の登場によって階層分化がまだ進行していないことを示している。ただし、周溝状床面施設を有する大小の竪穴建物跡は、古墳時代前期段階において、集落北部の 12B・A 区で建物方位を揃えることで、整った建物配置の景観を作り出していたと推測される。これは集団統制の一端と考えられ、このような動きの後に、集落そのものがこの地から消えるもしくは移転することは、寄島遺跡を含む鹿乗川流域遺跡群内で、首長層の下にしたまとまりの進行があったものと考えられる。移転先あるいは域内で継続していく集落は姫下遺跡であり、その背後の台地上に姫小川古墳を築造するに至ったものと憶測される。

今回の検討で鍵になったのは、竪穴建物跡の周溝状床下施設の存在であり、目的は不明な部分が多いものの、竪穴建物建築と密接に関わる施設であることも推測できた。つまり、何らかの環境へ対応するために各建物の主が自然発生的に編み出したものではない可能性が高いのである。転じてこれは特定集団の有する建築様式であり、鹿乗川流域遺跡群内でも寄島遺跡の他に姫下遺跡で集中的にみられ、かつ平安時代の竪穴建物跡（05A 区 SB07 など）にもみられる点は、「ムラ」の生活がどれくらいのスパンで継続しているのかを物語っているようでもある。もちろん鹿乗川流域遺跡群北群（B 地区＝宮下遺跡）でも若干認められるが、多数を占めるものとはなっていない。今後は竪穴建物構造からの視点もより深化させていく必要があろう。

参考文献
愛知県埋蔵文化財センター　2012 『姫下遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 168 集
愛知県埋蔵文化財センター　2017 『寄島遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 204 集
安城市教育委員会 2011『鹿乗川流域遺跡群Ⅶ』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 26 集
岡安雅彦　2011 「第 4 章　総括」『鹿乗川流域遺跡群Ⅶ』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 26 集
考古学フォーラム編集部　2013 『変貌する弥生社会　安城市鹿乗川流域の弥生時代から古墳時代』考古学フォーラム